

カリタス女子中学校 第四回入学試験

二〇二一年二月三日 実施

国語問題

(五〇分)

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

二〇一八年二月六日の午後、突然、スマホがつながらなくなりました。

会社で仕事をしていた時で、周囲の同僚がざわつき始め、あわててパソコンから「Twitterを見ると、「ソフトバンクがつかない」と大勢の人たちがツイート、ネットは大騒ぎになっていました。

一、二時間経ってから、メディアがネットでソフトバンクで大規模障害が起こり、携帯電話サービスが使えなくなっていると伝え始めました。その通信障害は全国規模に広がり、結局、四時間半も続きました。

この通信障害は、多くの人に影響しました。ある「Twitter」ユーザーは、自動車です仕事に出かけ、寄り道してカフェでランチを楽しみ、出ようとした時に財布を忘れたことに気づきました。カフェの店員さんにはお金を取ってきますと約束したものの、財布がないので駐車料金が払えません。仕方なく、近くの知り合いに連絡してお金を借りようとしたところ、スマホを見たら、あの通信障害が起きていました。そのユーザーは、スマホで電子決済サービスを利用していましたが、現金でしか駐車料金は支払うことができません。スマホに「LINE」も入っていましたが、公共交通機関を使って自宅まで戻ると時間がかかり、次の予定に間に合いそうにありません。そして、待ち合わせしている相手にもトラブルになっていることを電話できず、何か手段はないか調べようにも通信障害でネットが遮断されているために何もわからない状態でした。

すべてが詰んだユーザーが知恵を絞って選んだ解決策は、近くのコンビニに行つて、**【 A 】**使えた電子決済で単行本を買い、それをそのままリサイクルショップに売りに行き、現金を手に入れたそうです。おかげで、駐車料金とランチ代を払って次の予定には間に合ったとのことですが、ご本人にとっては大変なトラブルだったと思います。

私自身、通信障害が起きている間、スマホのメッセージやLINEが利用できず、家族との連絡が取れずに少し、不安を覚えました。たまたま、机に座ってパソコンでネットが使えたために実際には困ったことは起きませんでした。C 手の中にある小さな端末がもたらす情報を私たちがどれだけ頼りにしているか、痛感させられるように外出先だったら……と想像すると、手の中にある小さな端末がもたらす情報を私たちがどれだけ頼りにしているか、痛感させられました。電気や水道、ガスのように、目に見えてわかりやすいインフラではありませんが、高度な情報インフラの上に私たちの生活は成立していることをあらためて思わされたのです。

インターネットでは、メディアが発信したニュースは一見、平等に並んでいるように見えます。なるほど、ポータルサイトやSNSをスマートフォンでのぞけば、多くのニュースが同じフォントの見出し、同じ大きさの場所で毎日、掲載されています。

しかし、その一本一本のニュースをよく見れば、伝統的な全国紙から、ゴシップ記事の多いタブロイド紙、不倫報道を連発する雑誌、とにかく速くて身軽なネットメディアまで、全く異なる性質のメディアのニュースがひしめき、そのニュースがどのような「背景」を持って書かれているかまではなかなか理解できません。しかし、私たちに今、求められているのは、あまりに膨大なニュースの海から、自分にとって「本当に必要な情報」をどれだけピックアップできるか、というスキルです。

1、大学生が企業に就職するために、希望する企業やその業界の評判、成長率などを調べようとする時、関連する記事を信頼性の高いメディアから選び、多く読み込まなければなりません。通り一遍の情報では、ライバルに勝てないでしょうし、運良く就職できたとしても、業界自体が斜陽になってしまっただけは、元も子もないのです。

人生で何か大事なことを考えたり、決定したりする前には、必ずこうした作業が発生します。まず情報を集め、取捨選択する必要があります。適切な武器を装備しなければ戦場で勝てないように、私たちは①ジュークレンの戦士のように、武器を見抜き、選ぶ力が必要です。ネットリテラシーやメディアリテラシーという言葉をよく聞きますが、大部分はこのスキルのことだと考えて良いでしょう。

ところが、私たちには弱点があります。「確認バイアス」と呼ばれるものです。もともとは認知心理学や社会心理学の言葉で、自分の持つ②仮説や心理的状況を検証する際、その仮説を支持、肯定する情報ばかりを信じてしまうことを意味します。

この「確認バイアス」は曲者で、ついニュースでも自分に都合の良い、耳触りの良いものばかり見てしまいがちです。第二章でも紹介した研究を覚えているでしょうか。

ハーバード大学バークマンセンター共同所長のヨハイ・ベンクラール氏や、MITシビックメディアセンター長のイーサン・ザッカーマン氏らが、「ブライトバート」という保守系インターネットメディアを分析したところ、その読者は他のメディアから隔絶した状態にありました。

ブライトバートは二〇〇七年に設立され、トランプ大統領の腹心と言われて首席戦略官兼大統領上級顧問まで務めたステイブ・パンソン氏が率いるメディアです。大統領選の時には、トランプ陣営に好意的な記事を多く発信していました。この研究では、トランプ大

統領を支持する読者は、他のメディアのニュースよりもブライトバートが発信した記事を繰り返しTwitterやSNSでシェアしていたことが明らかになりました。

つまり、自分の好むニュースをひたすら集め、読み、ユーザー同士でシェアしあい、独自のメディア生態系を作り上げていたのです。実は、確証バイアスをさらに加速させる装置がインターネットにはあります。それが、「フィルターバブル」です。

この言葉を生み出したのは、アメリカの活動家、イーライ・パリサーさんです。彼が二〇一一年に^③著した『閉じこもるインターネット』（早川書房）によると、ある時、Facebookの自分のページから保守系の友人が消えていることに気づいたそうです。彼は保守系の人たちとは政治的な立場が違いますが、保守系の人たちの考えも知りたいと思い、わざわざ友人として^④トウロクしていました。

「しかし、^E彼らのリンクがわたしの^{**}ニュースフィードに表示されることはなかった」とパリサーさんは書いています。なぜなのでしょう？

ネットの進化してきた方向の一つが、ユーザーへの最適化でした。当たり前ですが、私たち一人一人の好みや考え方は違います。自分の見たいと思う情報や欲しいと思う商品があるwebサイトが「良いサイト」であり、当然のことながら多くのユーザー、つまりお客さんが集まっています。

2、webサイトはそれぞれ異なるユーザーが見たいと思う情報をユーザーに合わせて提示するようになります。これが、「パーソナライズ」です。たとえば、街の大きな書店で本を買うのと、Amazonで本を買うのでは、同じような行為に見えて、全く異なります。大きな書店では書店のルールや判断によって本が集められ、本棚に並んでいます^F、Amazonの画面でさし出される本は私が今までAmazonで購入した本の履歴を参考に、Amazonが勧める本です。

このようにパーソナライズされたネット書店では、「私が読みたい本」はどんどん見つかるかもしれませんが、実は今まで知らなかった本や好みではないと思っていた本、「私が知らない本」との出会いを失っている危険性もあるのです。

3、パーソナライズはあらゆる大きなwebサイトに採用されています。その最たる例がGoogleやFacebookです。話を戻すと、パリサーさんのFacebook上から保守系の友人たちが消えたのは、彼が保守系の友人がシェアしてきた情報をクリックするよりも、自分に近い考えの友人がシェアしてきた情報をクリックすることが多かったことを、Facebookが把握しているからだろうと推察します。

ほとんどの人が気づかないうちに、情報の取捨選択を勝手にされてしまっているというわけです。これを、パリサーさんは「フィルターバブル」と名付けました。今やネットではパーソナライズされたフィルターが仕掛けられ、私たちはバブル(泡)に包まれているかのよう、自分が見たいと思う情報だけに囲まれた「情報宇宙」に包まれることになる、と指摘します。

ネットで何か検索したり、ニュースを読んだりするだけでも、私たちの周りにはそれぞれ目に見えないフィルターバブルがあるのだと、まず知ることがとても大事なのです。

〈猪谷千香』その情報はどこから？ ネット時代の情報選別力〉(ちくまプリマー新書)より

〔語注〕

- ※ Twitter……………後に出てくるSNSの代表的なもののひとつ。利用者同士がツイート(短文や写真など)によって交流する。
- ※ Facebookも同じ種類のサービスである。
- ※ 電子決済……………支払いを現金でせずにクレジットカードなどで行うこと。
- ※ 詰んだ……………行きづまった。
- ※ メッセンジャー……………LINEと同じようなメッセージのやりとりをするためのアプリケーション。
- ※ インフラ……………インフラストラクチャーの略。電気、水道、鉄道など生活になくてはならない社会の基盤。
- ※ ポータルサイト……………グーグルやヤフーなどのようなインターネットにアクセスする入り口となるウェブサイト。
- ※ SNS……………ソーシャルネットワークワーキングサービスの略。インターネット上で利用者同士が交流することができるサービス。
- ※ フォント……………書体。文字の形のこと。
- ※ ゴシップ記事……………単純な興味やうわさをもとに書かれた記事。
- ※ タブロイド紙……………ふつうの新聞の半分のサイズの新聞。
- ※ 斜陽……………勢いがおとろえて、状態が悪化すること。
- ※ 肯定……………そのとおりだと認めること。
- ※ 腹心……………信頼して大事なことを打ち明けることができる部下のこと。
- ※ シェアしていた……………共有し合っていた。

- ※ リンク……………だれかのページに飛ぶ（入る）ための表示。
- ※ ニュースフィード……………自分や仲間が投稿とこうしたコメントや、おすすめの情報が表示される画面。
- ※ フィルター……………不要な情報をふるい落とす機能。

問一 ジュクレン ① 仮説 ② 著した ③ トウロク ④ のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 1 3 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア つまり イ しかし ウ たとえば エ ですから オ あるいは

問三 A ある「Twitter」ユーザーが「通信障害」によって直接受けた被害について述べたものとして正しいものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 待ち合わせの相手にトラブルを知らせられなかったこと。
イ カフェへの支払いを電子決済でできなかったこと。
ウ 公共交通機関を利用できなかったこと。
エ 解決手段を調べられなかったこと。
オ 家族と連絡がとれなかったこと。
カ 財布を取りに帰れなかったこと。

問四 「 B 」にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あまんじて イ かるうじて ウ さきんじて エ そらんじて オ うとんじて

問五 C 手の中にある小さな端末 とは何のことですか。答えなさい。

問六 筆者が D 武器 という言葉でたとえているのは何ですか。本文中から二字でぬき出しなさい。

問七 E 彼らのリンクがわたしのニユースフィードに表示されることはなかったとありますが、なぜこのようなことが起きたのでしょうか。本文から読み取り、答えなさい。

問八 F Amazonの画面でさし出される本は私が今までAmazonで購入した本の履歴を参考に、Amazonが勧める本です。とありますが、次の「購入履歴」のようにあなたが本を購入したと仮定した場合、Amazonからあなたに「さし出される本」として、最も可能性が高いのはどれですか。後のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

購入履歴（今までにあなたがAmazonで買った本）

『未来を変える目標 SDGs アイデアブック』（蟹江憲史 紀伊國屋書店）

『クジラのおなかからプラスチック』（保坂直紀 旬報社）

『eCO検定ポイント集中レッスン』（サステイナビリティ21／技術評論社）

『あなたが世界を変える日〜12歳の少女が環境サミットで語った伝説のスピーチ』

（セヴァン・カリス・スズキ 学陽書房）

ア 『学校では教えてくれない大切なこと12 ネットのルール』（旺文社編集 旺文社）

イ 『友だちってなんだろう？ ひとりになる勇氣、人とつながる力』（齋藤孝 誠文堂新光社）

ウ 『気になるあの病氣から自分を守る！ 感染症キャラクター図鑑』（岡田晴恵・いとうみつる 日本図書センター）

エ 『さかなクンの一魚一会〜まいにち夢中な人生！』（さかなクン 講談社）

オ 『生ゴミからエネルギーをつくろう！』（米林宏昌・多田千佳 農山漁村文化協会）

問九 「確認バイアス」、「フィルターバブル」に共通する問題点はどのようなことでしょうか。考えて書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

両親を失った大学生である「僕」(青山霜介)は、展示会の飾りつけのアルバイトの後、展示された水墨画の作品をぼんやり見てみると、一人の老人と出会う。老人から展示されている水墨画についての感想を一つ一つ聞かれ、「僕」はそれに答えていく。老人は「僕」の水墨画の感想を気に入り、水墨画など全く描いたことのない「僕」を弟子にすることを決める。その老人は湖山先生(篠田湖山)という日本を代表する芸術家であった。以下は、湖山先生が「僕」を自宅に招き、水墨画の指導を始める場面である。

「さて、では今日は、いよいよ基本をやってみようか。やる気はあるかな？」

「大丈夫です。がんばります」

そう言う湖山先生は笑った。今日は、僕の前だけに道具が置いてあった。

白い下敷きに、硯に、水の入った容器、棒状の墨、一本の筆に、内側に仕切りの付いた丸味を持った花形の陶器のお皿、最後に布巾だ。「下敷きは白いものを使う。これは紙を敷いたときに墨の濃淡がはっきりと分かるからだ。水墨画というのは、墨を水で薄めて使ってさまざまな変化を出していく。その変化をなるべく見やすくするための工夫だ。次にその仕切りの付いたお皿は梅皿という。形も梅の花のようだろう？パレットだと思えばいい。絵を描く人間ならお馴染みの道具だが、描かない人はあまり見たことがないだろう。水を張った容器を筆洗という。そして、あとは硯に、筆に、墨。墨は固形墨を使う」

「墨液ではないんですね。本格的な感じがします」

「墨液を使って教えることもあるが、私はあまり好きではない。それに良い硯に墨液を注ぐなんてもつたいないよ」

「これは良い硯のですか？」

「ああ、とても。使いこなせば、この世界と同じほど微細な墨がすれる」

僕はびっくりして硯をまじまじと見た。掌よりも少し大きいくらいの何てこともない長方形の硯に見えたが、確かに立派な木箱に入っていて蓋もついている。良いものだと言われると、なんとなく良いものだという気がしてしまうから不思議だ。ただの石だが石以上のものに感じる。

「硯は、書家や水墨を描く絵師にとつては、刀みたいなものだよ。そこからすべてが始まるんだからね」
「そんな大事なものを使わせていただいて、いいんですか？」

「大丈夫。大丈夫。手に入るのなら道具は良いものを使わないとね。良い硯だから大事にしてあげてね」
「分かりました。大事に使わせてもらいます」

嬉しそうに湖山先生は微笑んだ。湖山先生自身も道具にたくさんこだわりのあるのだろう。超一流の絵師なら当然のことなだろうけれど、その当然の言葉でも本人から聞くと嬉しい。

「では、まずは墨をするところから。これがなければ始まらないからね。おっと、水滴がなかったね」

湖山先生は立ち上がって、後ろの道具箱から、小さな急須のような容器を取り出し出てきた。そこに水が入っているらしい。湖山先生の皺皺の手が、硯に水を注いで、硯の面を濡らした。

「さあどうぞ」

と、湖山先生は墨をするように促した。僕は恐る恐る墨を持つて、硯の上でゴシゴシとすり始めた。おもしろいくらいに墨はすれて、透明な水は真っ黒になっていった。

しばらくすっていると粘りが出てきて、あとどれくらいすればいいのだろう、と視線を上げると湖山先生は居眠りをしていた。

確かに退屈だろうけれど、居眠りしなくても、とも思ったが、とりあえず湖山先生を起こすと、

「もうできたかね？」

と、私はまるで居眠りなんかしてなかったぞというような顔で、起き上がった。それから、僕の座っている席のほうへやってきた。
A 僕は背筋がぐつと伸びた。

着ている作業衣から漂う①セイケツそうなにおいは何なのだろう、と思っていると、湖山先生は無造作に筆を取って、目の前の紙に何かをバシヤバシヤと描き始めた。

この前と同じ、湖畔の風景が出来上がり、次に紙を置くと溪谷が出来上がり、最後には、竹が出来上がった。どれもまさしく神業で、一瞬の出来事だった。どうしてこんな速度で、こんなに高齢な老人が筆を操れるのだろうか？年齢を感じさせない若々しい動きだった。そして何より速い。動きの細部についてはあまりに速すぎて分からない。手に持った筆が、先日と同じく、硯と梅皿と布巾と筆洗の間を

回転しているということしか分らなかった。

気づくと墨はなくなり、硯の中身は空っぽになっていた。描かれた絵は床に広がっていた。そして湖山先生は衝撃的な一言を、僕に告げた。

「もう一回。もう一回、墨をすって」

僕は啞然としながらも、また一から墨をすり、湖山先生はうたた寝を始めた。

何が起こったのだろうか？ 何か、気に障ることをしてしまったのだろうか？

いろいろと思索しながら、惑いつつ墨をゴシゴシすり、これでいいだろうというところでまた湖山先生を起こした。

特別に機嫌が悪そうでもなく、かといって良さそうでもなく、また筆を取ると一気呵成にバサバサと描き上げて、硯の中身を空っぽにした。それからまた、さつきと同じせりふがかえってきた。

「もう一回」

僕は眉をひそめて、いったい何が起きているのだろうか？ と墨をすりながら考え続けた。

僕はとにかく墨をすり、湖山先生を呼んだ。湖山先生は居眠りから目覚めて、描いて、僕はまた同じ言葉をもらい、また墨をすり……と、そんなことを何度か繰り返した。もういい加減疲れてきたので、いろいろ考えるのをやめて、ただなんとなく手を動かし、**B** 有り体に言えば適当に墨をすって湖山先生を呼んだ。すると湖山先生は最初のときとまったく同じく、特に不機嫌でもなく不愉快でもなさそうな顔で、筆を取ると、

「筆洗の水を換えてきて」

と、言った。僕は言われたとおり廊下に出てすぐの場所にある流し場で、筆洗の水を新しいものに換えた。湖山先生の前に真新しい水を置いて席に着くと、湖山先生は **②** マチカマえていたように筆を取って、墨を付けて筆洗に浸した。その瞬間、湖山先生は口を開いた。

「これでいい。描き始めよう」

僕は湖山先生が何を言っているのか、分からなかった。どうしてまじめにすった墨が悪くて、適当にすった墨がいいんだ？

僕はなんとも腑に落ちないという表情をしていたのだろう。湖山先生はにこやかに笑って答えた。

「粒子だよ。墨の粒子が違うんだ。君の心や気分が墨に反映しているんだ。見ていなさい」

湖山先生は、筆をもう一度取り上げて、いちばん最初に描いた風景とまったく同じものを描いた。木立が前面にあり、背後に湖面が広がり、さらにその背後に山が広がっているという絵で、レイアウトはまったく同じだ。

だが湖山先生が筆を置いた瞬間の墨の広がりや、きらめきが何もかも違った。

※画素数の低い絵と高い絵の違いと言ったらいいのだろうか。実際に粒子が違うというのなら、そういうことなのだろう。小さなきらめきや広がりや積み重なり、一枚の風景が出来上がったとき、最初に見たときは漠然と美しいとしか感じられなかった絵が、二枚目になると懐かしさや静けさやその場所の温度や季節までも感じさせるような気がした。細かい粒子によって出来上がった湖面の反射は、夏の光を思わせた。薄墨で描かれた線のかすれが、ごく繊細な場所まで見て取れるので、眩しさや、色合いまでも思わせ、波打つ様子は静けさまでも感じさせた。その決定的な一線は、たった一筆によって引かれたものだった。同じ人物が同じ道具で、同じように絵を描いても、墨のすり方一つでこれほどまでに違うものなのかと、僕は愕然とした。とたんに僕は恥ずかしくなった。

僕は **C** とんでもない失敗をさっきまで繰り返していたのだ。湖山先生は相変わらず、にこやかに笑っている。私は何も言わなかったのが悪いが、と前置きした後に湖山先生は言った。

「青山君、力を抜きなさい」

静かな口調だった。

「力を入れるのは誰にだってできる、それこそ初めて筆を持った初心者にだってできる。それはどういうことかという、凄くまじめだということだ。本当は力を抜くことこそ技術なんだ」

力を抜くことが技術？ そんな言葉は聞いたことがなかった。僕は分からなくなつて、

「まじめというのは、よくないことですか？」

と訊ねた。湖山先生はおもしろい冗談を聞いたときのように笑った。

「いや、まじめというのはね、悪くないけれど、少なくとも **I** 自然「じゃない」

II 自然「じゃない」

「そう。 **III** 自然「じゃない。我々はいやしくも水墨をこれから描こうとするものだ。水墨は、墨の濃淡、**※**潤濁、**※**肥瘦、**※**階調でもつて

IV 自然「というものを理解しようとしなくて、どうやって絵を描けるだろう？ **※**森羅万象を描き出そうとする試みのことだ。その我々が **IV** 自然「というものを理解しようとしなくて、どうやって絵を描けるだろう？」

心はまず指先に表れるんだよ」

僕は自分の指先を見た。心が指先に表れるなんて考えたこともなかった。それが墨に伝わって粒子が変化したというのだろうか。だが、たしかにその心の変化を墨のすり方だけで見せつけられた身としては、うなずくしかない。

「君はとてもまじめな青年なのだろう。君は気づいていないかもしれないが、真つすぐな人間でもある。困難なことに立ち向かい、それを解決しようと努力を重ねる人間だろう。その分、自分自身の過ちにもたくさん傷つくのだろう。私はそんな気がするよ。そしていつの間にか、自分独りで何かを行おうとして心を深く閉ざしている。その強張りや硬さが、^③所作に現れている。そうなるとその真つすぐさは、君らしくなくなる。真つすぐさや強さが、それ以外を受け付けなくなってしまふ。でもね、いいかい、青山君。水墨画は孤独な絵画ではない。^D 水墨画は自然に心を重ねていく絵画だ」

僕は視線を上げた。

言葉の意味を理解するには、湖山先生の声があまりにも優しすぎて、何を言ったのか、うまく聞き取れなかった。不思議そうな顔で、僕は湖山先生を見ていたのだらう。湖山先生は言葉を繰り返した。

「いいかい。水墨を描くということは、独りであるということとは無縁の場所にいるということなんだ。水墨を描くということは、^V 自然との繋がりを見つめ、学び、その中に分かちがたく結びついている自分を感じていくことだ。その繋がりが与えてくれるものを感じることだ。その繋がりといっしょになつて絵を描くことだ」

「繋がりといっしょに描く」

僕は言葉を繰り返した。僕にはその繋がりを隔てている E が見えていた。その壁の向こう側の景色を、僕は眺めようとしていた。

その向こう側にいま、湖山先生が立っていた。

「そのためには、まず、心を ^{VI} 自然 にしないと」

そう言つて、また湖山先生は微笑んだ。湖山先生が優しく筆を置く音が、耳に残った。その日の講義は、ただそれだけで終わった。

何か、とても重要なことを惜しみなく与えられているようで、そのすぐ前を簡単に通り過ぎてしまふようになっていて自分を感じていた。小さな部屋に満たされた墨の香りと、湖山先生の穏やかな印象が、カチコチに固まっていた水墨画のイメージをポロポロと打ち壊して

いくのが分かった。

父と母が亡くなつて以来、誰かとこんなふう長い時間、穏やかな気持ちで向き合つたことがなかったのだと僕は気づいた。

〔砥上裕将「線は、僕を描く」(講談社)より〕

〔語注〕

- ※ 水墨画……………墨一色の濃淡によって対象を描写する絵画。黒一色を用い、その色の濃淡や潤いによって描く。
- ※ 作業衣……………和服の作業着。
- ※ 一気呵成……………物事を一気になすとげること。
- ※ 画素数……………一枚の写真をいくつの「画素」(ここでは「粒子」)を並べて表現しているか、という数字。数字が大きくなるほど画素の数が増えるので、より細かいところまで写せることになる。
- ※ いやしくも……………仮にも。
- ※ 潤渴……………よく墨を含んだ筆で書いた線(潤筆)と、墨の含みの少ない筆で書いた線(渴筆)のこと。この二つを組み合わせることによって、立体感や深みが表現できる。
- ※ 肥瘦……………肥えていることとやせていること。
- ※ 階調……………明るいと暗いところまでの段階(グラデーション)のこと。
- ※ 森羅万象……………宇宙に存在するすべてのもの。

問一

① セイケツ

② マチカマエ

③ 所作 のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二

A 僕は背筋がぐっと伸びた。とありますが、この時の「僕」の気持ちを説明したものとしてみっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 湖山先生は実は居眠りをしておらず、「僕」の動きをじっと観察していたことに気づいて、焦っている。

イ 初めて墨をすってみると体が痛くなったので、水墨画を描くことは窮屈だと気づきいらいらしている。

ウ 墨をするのに時間がかかり、それをとがめられたことで、この後の湖山先生の指導を不安に思っている。

エ 超一流の絵師である湖山先生が近づいてきたため、この後行われる指導に緊張して姿勢を正している。

オ 居眠りから起きた湖山先生が厳しく指導をし始め、いよいよ水墨画の指導が始まることに期待している。

問三

B 有り体に言えば とはどのような意味ですか。もっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 飾ったり隠したりしないで、ありのままに言うこと。

イ 具体例や比喻を交え、技巧をこらして言うこと。

ウ 確かな情報と不確かな情報を混ぜて言うこと。

エ 相手に伝わるよう、比喻を交えてわかりやすく言うこと。

オ あまりないことを、あるように嘘を交えて言うこと。

問四

C とんでもない失敗 とありますが、どのような「失敗」ですか。六十字以内で具体的に説明しなさい。

問五

D 水墨画は自然に心を重ねていく絵画だ。とありますが、ここでの「自然」の使い方と同じ使い方をしている本文中の一節を、次のア～カの中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 「いや、まじめというのはね、悪くないけれど、少なくとも I 自然 じゃない」

イ 「II 自然 じゃない」

ウ 「そう。III 自然 じゃない。」

エ 「その我々が IV 自然」というものを理解しようとしなくて、どうやって絵を描けるだろう？」

オ 「V 自然」との繋がりを見つめ、学び、その中に分ちがたく結びついている自分を感じていくことだ。」

カ 「そのためには、まず、心を VI 自然 にしないと」

問六

E に入る、この時の「僕」の気持ちを象徴している表現としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア モノクロの部屋の壁

イ カラフルな部屋の壁

ウ ガラスの部屋の壁

エ 大理石の部屋の壁

オ 真っ白な部屋の壁

問七

F 穏やかな気持ちとありますが、湖山先生との出会いを通じて「僕」がこのような心情に変化したのはなぜですか。その理由をわかりやすく説明しなさい。

問八

本文全体を通じて、湖山先生はどのような人物であると描かれていますか。湖山先生の人物像を説明したものとしてみてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 良い道具は気前よく貸し出し、「僕」に超一流の絵師になってもらいたいと願う熱心な人物。
- イ 優しい言葉、静かな口調で「僕」のこわばった心をゆつくりとほぐそうとする穏やかな人物。
- ウ 悲しみに沈む「僕」の頭の中を、水墨画のことではいっばいにしてしようとするずるがしこい人物。
- エ 厳しい水墨画の指導を通して、両親のいない「僕」の弱い心を鍛えようとする激しい人物。
- オ 水墨画初心者「僕」にも、墨のすり方から一つひとつ手とり足とり指導を行う優しい人物。

国語の問題はこれで終わりです。

